

Alberta News

Hokkaido-Alberta Dairy Science & Technique Exchange Association

北海道アルバータ
酪農科学技術交流協会

No. 96

2007年(平成19年)3月31日

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-------------------|
| 01 | 今、また酪農を考える | 06~07 | 第34回(2007年度)派遣留学生 |
| 02 | 第34回定期総会と派遣留学生報告会の開催 | 08~09 | アルバータ州で学ぶ |
| 03 | 海外農業技術セミナー | 10 | 交流実績一覧 |
| 04~05 | 第33回(2006年度)派遣留学生からのたより | 10 | 会費・寄付金 |

今、また酪農を考える

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会

会長 平尾 和義
(学校法人 酪農学園理事長)



本協会の酪農科学技術交流事業の推進につきましては、日頃から会員ならびに関係者皆様の格別のご支援とご協力を賜り衷心より厚くお礼申し上げます。

本協会は2006年度も、皆様方のご協力をいただきながら、留学生の派遣、海外農業技術セミナー開催など、予定していました活動を以下のとおり行いました。

2006年度派遣留学生は、酪農学園大学酪農学科3年生の学生2名、食品科学科卒業生1名および社会人1名の計4名を2006年4月8日より1年間の予定で派遣いたしました。今年度より、従来の酪農研修コースに加えて英語研修コースを設け、英語研修を4ヵ月間行うコースをスタートしました。今回は、このコースに1名が応募し、アルバータ大学のESLにおいて研修を行いました。その他の3名は通常の酪農研修コースに参加し、それぞれ酪農家で研修を行い、2006年9月より留学生は、オールズカレッジに移り、それぞれ希望する科目を履修し、さまざまな経験をしながら留学生活を送っていますが、本年4月末で留学スケジュールを終える予定になっています。

2007年度の派遣留学生については、選考試験を2006年11月に実施し、酪農学園大学酪農学科2年生2名、食品流通学科3年生1名を選考いたしました。これらの留学生3名は、英語研修や危機管理等に関する派遣前研修を受

講した後、3月16日の出発式を経て、酪農研修コースは2007年4月7日、英語研修コースは4月25日に出発する予定です。

今年度も本協会の主幹事業の一つである海外農業技術導入普及事業の海外農業技術セミナーは2007年2月14日に札幌市教育文化会館において開催されました。今回は、酪農学園大学と学術交流協定を結ぶカナダ・アルバータ大学農林家政学部長のジョン・ケネリー教授を招いて「デザイナーズ・ミルク一次世代高機能ミルクへの可能性」についてのセミナーを行いました。ケネリー教授の研究グループは、乳牛に給与する飼料と牛乳成分の研究において多くの業績をあげています。今回は、人にとって有益な成分を含む新しい牛乳の生産技術の可能性について講演いただき、特に、給与飼料の内容を工夫することにより、抗癌作用が期待されている共役リノール酸を豊富に含む牛乳を生産する技術の可能性について、多くの研究データに基づき、分かりやすく解説されました。

最近、牛乳の食品としての価値に関する誤った情報が流れ、消費者はその情報によって混乱していますが、酪農学園大学をはじめ多くの関係者によって、牛乳の優れた価値について、消費者の方々にあらためて認識していただくための努力が行われております。当協会もまた、牛乳の消費拡大および現在の生産

過剰問題の対策を探ることを念頭に今回のジョン・ケネリー教授のセミナーを計画しましたが、今回のセミナーは、新しい牛乳生産の可能性と酪農経営のあり方について重要な示唆を与える内容であったと思います。

来年度も生産現場のご要望に応えるべく、セミナー開催に向け準備を進めているところです。

牛乳消費の低迷に伴う生産過剰は、酪農家にとって経営的にも精神的にも大きな打撃を与えています。また、食の安全、安心が求められる今日にあっては、消費者の要望に対応した「美味しい」牛乳の生産に努めるとともに、人の健康維持・増進に寄与する機能を有する新しい牛乳の生産も視野に入れた技術革新が必要になるであろうと思われます。その意味において、今あらためて酪農の将来像を考える時期が来たと言えるかもしれません。本協会は、微力ながらその一翼を担うべく、交流事業の推進と海外の技術情報の収集・紹介に努力していきたいと考えています。

最後に、これまでの「アルバータだより」を「アルバータニュース」に衣替えし、多くの方々により気軽に楽しんで読んで頂くように新しくいたしました。今後も皆様に親しんでいただける内容になるよう努めたいと思っております。今後とも一層のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

第34回定期総会と派遣留学生報告会の開催

2006年6月28日、酪農学園本館において第34回定期総会（2006年度）を開催し、会員、関係者ら25名の方々にご出席いただきました。

定期総会は、平尾会長があいさつを述べ、次いで北海道農政部農政課主幹の田辺利信氏から来賓のごあいさつをいただいた後、以下の議案がそれぞれ承認されました。

- 第1号議案 2005（平成17）年度事業報告ならびに収支決算、監査報告
- 第2号議案 2006（平成18）年度事業計画ならびに収支予算（案）
- 第3号議案 佐藤貢・雪印乳業—酪農学園・アルバータ大学奨学金の実施要領案について
- 第4号議案 任期満了に伴う役員の変更について

また、定期総会終了後には、派遣留学生報告会を行い、2005年度（第32回）派遣留学生の宮川沙織さんが、カルガリー近郊の Searock Dairy Farm での実習体験やオールスカレッジでの留学体験を、写真を交えて報告しました。（宮川さんの研修報告は、2006年7月発行の酪農研修派遣留学報告書に掲載しています）

〈2006年度 役員一覧〉

役職	氏名	所属	備考	役職	氏名	所属	備考
名誉会長	高橋はるみ	北海道	知事		土井 時久	雪印乳業株式会社 酪農総合研究所	所長
顧問	西山 泰正	北海道	農政部長		小川 遼男	雪印乳業株式会社	常務取締役
	矢野 征男	ホクレン農業協同組合連合会	代表理事 会長		井上 詳介	酪農学園後援会	常務理事
会長	平尾 和義	学校法人酪農学園	理事長		岡本 全弘	酪農学園大学酪農学部	学部長
副会長	金川 幹司	北海道酪農協会	会長		谷山 弘行	酪農学園大学獣医学部	学部長
	町村 末吉	酪農学園後援会	会長		中原 准一	酪農学園大学環境システム学部	学部長
常任理事	松中 照夫	酪農学園大学 エクステンションセンター	所長		小阪 進一	酪農学園大学酪農学部 酪農学科	学科長
	黒澤力太郎	学校法人酪農学園	学園長		村岡 範男	酪農学園大学酪農学部 農業経済学科	学科長
理事	高橋 節郎	学校法人酪農学園	副理事長	参 与	菊地 政則	酪農学園大学酪農学部 食品科学科	学科長
	渡邊 誠治	学校法人酪農学園	常務理事		鈴木 忠敏	酪農学園大学酪農学部 食品流通学科	学科長
	大谷 俊昭	酪農学園大学	学長		藤崎 志朗	酪農学園大学環境システム 学部環境マネジメント学科	学科長
	安宅 一夫	酪農学園大学	教授		岩井 洋	酪農学園大学環境システム 学部地域環境学科	学科長
	武田 善行	北海道国際農業交流協会	会長		矢吹 哲夫	酪農学園大学環境システム 学部生命環境学科	学科長
	掛村 博之	雪印種苗株式会社	代表取締役社長		菊田 治典	酪農学園大学短期大学 部酪農学科	学科長
	北 良治	北海道ホルスタイン 農業協同組合	代表理事 組合長		石田 貞夫	酪農学園大学校友会	会長
	大山 裕	日本酪農青年研究連盟	委員長		井上 錦次	酪農学園大学短期大学 校友会	会長
	菅沼 英二	酪農学園大学	名誉教授		高倉 勝洋	学校法人酪農学園	監事
	佐藤 巖	社会福祉法人 北海道いのちの電話	理事長		佐々木正一	酪農業（北海道標津町）	酪農業
監 事	田子根良博	雪印種苗株式会社	コンプライ アンス室内部 監査担当課長	松本 勇	酪農業（北海道標津町）	酪農業	



佐藤貢・雪印乳業 酪農学園・アルバータ大学奨学金について

この奨学金制度は、酪農学園大学の学生に対してアルバータ大学の研修プログラムへの参加を奨励し、学生の資質向上と国際感覚の涵養を目的としています。第33回定期総会議事において、アルバータ大学との協議を進めることの基本了承を得ました。その後、アルバータ大学との間で具体的な協議を重ねた結果、下記の概要で同意を得られましたので、ご報告いたします。

〈概要〉

1. 当面3年間は、酪農学園大学学生派遣のための奨学金制度とし、3年実施後に再検討する。
2. 対象は、夏季短期研修プログラムとし、一人あたり5万円、毎年10名に奨学金を授与する。
3. エクステンションセンターが、奨学金授与候補者を北海道アルバータ酪農科学技術交流協会に推薦し、同協会会長が奨学生を決定する。
4. 同意書の期限は3年間とし、継続の可否について検討する。

海外農業技術セミナー

Designer
Milk

講師紹介

カナダ・アルバータ大学 農林・家政学部長
Dean, Faculty of Agriculture, Forestry & Home Economics, University of Alberta

ジョン・ケネリー 教授
Dr. John J. Kennelly

1976年にダブリン大学を首席で卒業、1980年にアルバータ大学で博士号を取得。1997年からアルバータ大学農林・家政学部 農業・食品・栄養科学科の教授として勤務し、2004年、同学部長に就任した。

ケネリー氏は、アメリカをはじめベネズエラ、メキシコ、アイルランド、日本、韓国、中国、台湾、パキスタンなど多くの国々に講演者や相談役として招かれている。また、20年に渡り、プログラム責任者として西カナダ酪農セミナーを大成功に収めた。

主な研究分野は、栄養学・泌乳生理学であり、乳合成の生物学的効率と食物として、品質に作用する栄養学的・遺伝学的因子が中心である。彼の研究グループは、牛乳の脂肪酸組成の変化における栄養素の役割を重点に、乳組成における栄養素と遺伝子の作用解明に貢献している。



2007年2月14日(水)、「海外農業技術セミナー」を札幌市教育文化会館で開催し、道内はもとより、沖縄、兵庫、東京など全国から約100名が参加されました。

今回は、アルバータ大学農林・家政学部長のジョン・ケネリー教授を招聘し、「デザイナーズ・ミルク ～次世代高機能ミルクへの可能性～」という斬新なテーマで講演をいただきました。

ケネリー教授には、本協会設立以来、両国の交流を熱心に推進いただいております。また、当日は、本協会生みの親である故佐藤貢先生の誕生日であり、ケネリー教授は尊敬の念で佐藤先生を偲んでおられました。

ケネリー教授は、現在、乳牛の栄養分野において旺盛な研究を展開し、その業績は高く評価され、カナダおよびアメリカにおいて数々の学会賞を受賞しています。特に、現在、世界で注目されている抗がん作用を有する牛乳中の共役リノール酸(CLA)を増強する飼料についての研究の第一人者です。

ケネリー教授の招聘は、3年越しでやっと実現することができました。教授の講演では、CLAを中心としたエキサイティングな研究内容をパワーポイントでわかりやすく解説していただき、4時間の講演時間がとても短く感じられました。そして、講演終了後も個別の質問が続き、ケネリー教授はそれに丁寧に答えられ、親近感がありました。

現在、わが国の酪農界においては、牛乳の消費減退による牛乳の減産型計画生産、さらに牛乳に対するバッシングの本場の登場など残念な状況が続いていますが、今回の講演は、わが国の酪農に勇気と希望を与えてくれました。

講演の内容のポイントは、以下のようです。

1. 牛乳・乳製品の需要の変化とその対応
2. 牛乳の価値と魅力の再発見
3. 牛乳は機能性・生理活性物質を豊富に含んでいる
4. 牛乳のCLAは、がん、心臓病、肥満、糖尿病、腎臓病、骨密度に効果がある
5. 牛乳のCLAは飼料で増強できる
6. CLAは、牛乳、酪農のイメージをアップする

日本の酪農界では、まだCLAについて関心が低いようです。今回のセミナーが、CLAの知識を深め、牛乳の消費拡大と日本酪農の活性化に役立てば幸いです。

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会

理事 安宅 一夫

(酪農学園大学 酪農学部 家畜飼料科学研究室 教授)

次回セミナーのご案内

カナダ・サスカチュワン大学(サスカチュワン州)デイヴィッド・クリステンセン名誉教授を講師にお迎えし、2007年7月19日(木)に開催する予定です。テーマは「Accurate feeding and management for high producing dairy cows」となる予定です。会員の皆様には後日あらためて案内を送付させていただきます。

第33回(2006年度)派遣留学生からのたより

ジャガイモ大国での酪農実習

酪農学園大学 酪農学部 酪農学科4年
五十嵐 博之

5月12日から8月27日までの約4ヶ月間を私はヘルミッグファームで酪農実習をして生活しました。ヘルミッグファームは牛が約340頭(搾り180頭)もいる大きなファームで、牛の他にもラマ、羊、鶏そして兎を家畜として育てていて、ペットに犬と猫を飼っていました。

家族構成はオランダから移民してきたバーナード58歳、アントニア56歳そして息子のヘンリック26歳の3人で生活していました。

私の基本的な仕事は搾乳の時間は牛追いと、搾乳、寝床掃除、パーラー掃除でした。搾乳の時間以外は牛舎作業、牛舎掃除、牛舎工事、牛舎建設、芝刈り、草刈り、枝落し、

給餌、牧草運搬、芋ほりなどをやりました。私は草刈りと芝刈りと枝落しが凄く好きでした。のこぎりを持って大きな木に登って枝を刈るのは凄く気分が良かったです。少しだけ危険でしたけど。草刈りはとても広い敷地だったので終わるのに1週間以上もかかりました。芝刈りは機械に乗って芝を刈るのですがとても気持ち良かったです。もちろん搾乳も牛舎作業も楽しくて好きでした。

でも食事だけはとても辛かったです。毎晩ジャガイモに肉汁をかけて食べるのがとても辛くて全然食べられませんでした。たまにでのご飯がとてもおいしく感じた事を今でも忘れません。実習を終えたらすぐに戻りましたが20キロものダイエットにも成功しました。

酪農実習をしている時はホストファミリーとの人間関係、食事、仕事などが辛く感じる時がありましたが、今になって思

えば酪農実習をしている時が一番楽しかったと思えます。英語が全然話せないくせにホストファミリーと口喧嘩をしたり、鶏小屋から鶏が脱走したのを4人で追い掛け回したり、トラクターで牧草地を爆走してみたり、またかって思うほど子牛の出産に立ち会ったり、目の前で帝王切開を見たり、病気で死んでいく牛を見たり、牛を射殺する瞬間を見たりしました。日本にいたら経験できなかったことがたくさんできたと思います。酪農実習をしてよかったと思っています。



ホストファミリー

Oldsでの酪農実習を通して気付いたこと

酪農学園大学 酪農学部 酪農学科4年
吉田 恵美子

今回、私は酪農実習プログラムを選んだわけですが、日本での酪農経験は大学の授業として1、2年生の時に履修した酪農実習しかありませんでした。日本での



この牛は、あるアルバータ州の共進会でNo.1に輝いた牛です。ショーに出す前に身支度を整えようとしているところです。

酪農経験はつたないものですが、カナダ(Olds)での酪農体験と照らし合わせて、いくつかの相違点を見つけました。

まずは所有する敷地面積の違いです。私の実習したファームの敷地の総面積は194.1ヘクタール(東京ドーム41.5個分)もあり、ファームの見回りには車を使っていました。私が大学2年生の時にお世話になった酪農家の所有している頭数が25頭と小規模だったということもあり、計165頭もの牛を所有しているカナダの実習先は非常に大規模に思えました。規模が大きい分、トラクターなどの大型の機械を使って時間と労力の削減をはかっていました。

次に、カナダの実習先では、広大な敷地を利用して、アルファルファ、オーチャードグラス、チモシー大麦、キャノーラなどの牧草を育てていました。与えている飼料作物は全て自給自足です。カナダでは、日本に輸出するための飼料作物を育てている農家が多くあるそうです。

また、Oldsでは移民が酪農を営んでいます。オールズにはオランダからの移民が多く住んでおり、酪農家のおよそ7割がオランダからの移民だということです。今回の酪農研修プログラムでは3人全員の実習先の家族はオランダからの移民でした。そのため、オランダ語を耳にする機会も多々ありカナダにいながら英語とオランダ語の両方を聞けるという非常に貴重な経験ができました。

さらに、日本では珍しい赤毛のホルスタインを目にする機会が多々ありました。実習先では、計5頭、そのうち1匹は実習中に生まれました。共進会のパンフレットにも赤毛のホルスタインが掲載されていました。オランダでも赤毛のホルスタインは珍しくないということです。上記にも述べましたが、カナダはとにかく広大な土地を持っています。放牧する土地も十分にあり牛は勿論のこと、人も余裕を持ってのびのびと過ごしているように思えました。

第33回(2006年度)派遣留学生からのたより

カナダ人との
交流から学んだ事酪農学園大学 酪農学部 食品科学科卒業
成田 慈

私はカナダ・オールズカレッジ派遣留学・英語研修コース参加という事で、1年間の留学プログラムの最初の4ヶ月間はエドモントンのアルバータ大学(U of A)のESLに通い、後半はオールズカレッジで生活しています。私は日々、沢山のひととふれあい、様々な事に参加する事でカナダの文化を知り、いろいろな場面で使う英語に触れられるように心がけています。

U of AのESLに通っていた間は、カナダ人宅にホームステイをしていました。お父さん、お母さん、私と歳の近い娘2人

が暮らす家でした。初めのうちは、人の家で長期生活をするという事に対して、かなり気を使いました。しかし、ホストマザーは「ここはあなたの家なのだから自由にくつろいで」と言ってくれました。冷蔵庫の中も「Help yourself.」と言って、自由に何でも食べてと言っていました。私はラッキーな事にホストファミリーの親戚の結婚式と、Reunion party(親睦会)に参加させてもらいました。結婚式は別に知り合いではないのにとても感動しました。教会での式が終わったあと、花嫁さんと花婿さんがJust Marriedと派手にデコレートされた車に乗って式場を去って行った事や、白いドレスを着たブライドメイドがいた事は映画で見た通りでした。式の後のパーティーではみんな最高に盛

り上がり、私も深夜まで踊り続けました。Reunionはホストマザーの親戚が集まるパーティーで、ホストマザーは大家族だったので会場には200人以上の親戚達が集まっていました。結婚式、Reunionでは沢山のカナダ人達と交流を持つ事ができ、パーティーが大好きなカナダ人の文化を知ることができました。(写真はReunionにてホストファミリーと)

9月からは、オールズカレッジでの生活が始まりました。カレッジではソフトボールクラブに入部すると行く前から決めていたので、ソフトボールクラブの監督と事前に連絡を取り、即入部しました。体育会系のノリの良い部員達とはすぐに打ち解けることができました。練習は週に3~4回あり、試合には2回出ました。1回目の試合は雨のために三回でノーゲームになってしまいましたが、2回目の試合はバッターボックスに立ったときのチームメイトの応援に後押しされて、2打数2安打という最高の出来でした。結局ホームイン直前でタッチアウトされてしまいましたが、チームメイトは「Good job! Yori!」とハイタッチで迎えてくれました。ソフトボール部で活動する事によって、くだけた英語が身に付きました。今までは「How is it going?」と聞かれたら、「Good.」と答えていたのですが、ここでは「Awesome!」(最高だよ!)という言葉が覚えられました。今ではこの「Awesome!」という言葉は、うれしいことに遭遇した時などいろいろな場面で使っています。ソフトボールは団体競技なので、とにかくコミュニケーションをとる事が必要でした。そして人の名前をとにかく早く覚えて会話をすることが大事なことだと感じました。ソフトボール部での経験は多くのことを学ぶことができ、大切な思い出となりました。

自分が納得のいく留学生活ができるように、残りのわずかな生活も様々な事に挑戦して、いろんな人と交流を持ち、沢山のことを吸収していきたいです。



留学生に学ぶ英会話

Help yourself.

ご自由にどうぞ。/セルフサービスでどうぞ

Good job!

よくやった! /よくできました!

How is it going?

元気? /最近どうしてる? /調子はいかが?

Awesome!

素晴らしい! すごい! 注:もともとは、「<光景などが>恐ろしい、すさまじい」という畏敬の念を表す言葉ですが、俗語では「見事な」、「ステキな」という意味で使われています。

第34回 (2007年度) 派遣留学生

2006年11月11日(土)に適性検査、一般教養、英語、作文、面接試験を行い総合的に判断し、第34回派遣留学生として「酪農研修コース」に1名、「英語研修コース」に2名を派遣することが決定いたしました。

英語研修コース 2名

出発に向けての抱負



酪農学園大学 酪農学部
食品流通学科3年
赤樫 尚哉

私は、英語が苦手です。そんな苦手な英語を使うカナダに行くのも後、1ヵ月後となりました。苦手な英語を何故やるのか。それには2つ理由があります。まず1つ目は、海外の様々な人々と文化や考え方について交流がしたい。それによって、自分の思考が広がり様々な考えや意見が言えるようになると思います。2つ目は、苦手な英語を克服し自分に自信をつけ成長さ



せたい。私は常に人は何かに挑戦していかなければ成長はしないと思います。これらの事をカナダに行き実現させる為には、1年間努力していかなければ何も得ることはできないでしょう。カナダに行く事はさほど難しくはないと思います。大切な事は、カナダに行き何をやってきたかという事です。カナダで生活するのは、楽しいことより辛いことの方がいっぱいあ

ると思います。辛いときでも私は、笑顔でそれを乗り越えていきたいです。1年後、日本に帰って来た時、私は辛かったことなども笑顔で皆に話したいと思っています。



留学への抱負



酪農学園大学 酪農学部
酪農学科2年
三好 佐穂

留学の抱負としては留学の大きな目的である英語の語学力をあげる事、特にリスニング能力を上げたいです。日常会話で何を言われているか理解し、また授業で何をいっているのか少しでも多く聞き取れることを目標にしたいです。そのためにも多くの人とコミュニケーションをとって英語の理解に努めたいです。

それから生活や、習慣、授業などでわからないことがあったら、あいまいにわからないままにしておくのではなく、恥ずかしがらずに必ず聞くという癖をつけることを目標にしたいです。これからわからないことがたくさんでくる機会がご



まんとあると思うのでわからないことは投げ出さずに理解できるまであきらめたくないです。この2つを留学するにあたって自分の目標にしたいと思います。またこの留学でお金を出してくれ、応援してくれた親に本当に感謝しています。この感謝の気持ちを忘れずに毎日の生活を無駄にしないですごしていきたいです。



酪農研修コース 1名

留学にむけて

酪農学園大学 酪農学部
酪農学科2年

尾形 亜紀

今年の酪農研修コースは私1人だけです。英語で意思の疎通がうまくいかず淋しいと感じる時があるでしょう。しかし周りに私を助けてくれる人がいないので誰かに甘えることができません。つまり私が積極的にしなければ何一つ得ることなく帰国することになります。酪農研修では技術を向上させ、カナダと日本の違い

は何か、日本にはない良い所を学びたいです。そのためには言われた作業をただこなしていただだけでは何も学べません。親方の酪農に対する想いを聞くことでカナダの酪農が見えてきます。しかしたった4ヵ月間しか酪農に関われません。この限られた時間の中で体全体から1つでも多く吸収したいです。また私は1年間で住

む場所が3回変わります。文化や習慣の違いをたくさん学べるチャンスなのでその家庭のルールに合わせて生活したいです。何事にも積極的に、笑顔を忘れることなく1年間を楽しみます。



出発式開催

2007年3月16日(金)に出発式を行いました。平尾会長のあいさつの後、奨学金が授与され、これからカナダへ派遣される3名がそれぞれの自己紹介と留学の抱負を英語で語りました。牛乳好きの赤樫くんは、カナダ産の牛乳を飲むことを今からとても楽しみにしていること、三好さんは趣味を兼ねて、映画を字幕なしで鑑賞しながらリスニング力を向上させること、将来酪農に携わる仕事に就くことを希望している尾形さんは、カナダの酪農をじっくり体験して勉強することなど、これから始まる留学生活に期待を膨らませている様子が伝わりました。

危機管理セミナー

特定非営利活動法人海外留学生安全対策協議会主催の「海外派遣・研修における危機管理セミナー」が、2006年12月18日に明治大学駿河台校舎リパティタワーで開催され、全国の国公立大学から約50名が参加しました。今回は「オリエンテーションのモデルケースを考える」と題し、出発前に行うオリエンテーションの重要性や、留学の成果を最大限に上げるためのオリエンテーションの内容についての提案がありました。ここでは、留学に大事な要素が「態度・技術・知識」とであると定義され、出発前・留学中・帰国後の目標を時間軸で考える「態度」、語学力・表現力・ストレス管理能力を身につける「技術」、自国と派遣国の文化や法律、規則を知る「知識」が挙げられました。当協会では、このセミナーを参考に、第34回オールズカレッジ派遣留学出発前ガイダンスとして、留学に対する心構えを日本語と英語の両言語で学ぶオリエンテーションを3月2日に開始しました。3名の学生にはオリエンテーションの効果をカナダで発揮してくれることを期待しています。

アルバータ州で学ぶ

Alberta Essay For Japan

カナダ・オールズカレッジ国際交流担当

Audrey Lemieux

毎年外国人がアルバータ州を勉強の地に選ぶのには、多くの理由があります。アルバータ州の見事な景色、親切な人々、安全な環境だけでなく、アルバータ州には水準の高い教育システムが整っているということが世界的にも知られているからでしょう。学生は、質の高いカリキュラム、しっかりとした評価査定プログラム、高度な訓練を受けた教師陣、そして革新的な技術により広げられた教育の機会という恩恵を受けています。このようにいきいきと学べる環境のおかげで、アルバー

タ州の学生は常に高い学力を国際的な査定においても明示できるのです。

私たちは、アルバータ州の学生が受けている恩恵を留学生にもぜひ経験してもらいたいと考えています。最近のアルバータ州管轄の学校では、韓国、日本、中国、香港、メキシコ、ドイツなど、世界中からたくさんの学生の受け入れを行っています。語学力の向上、カナダや北アメリカについての知識、世界中から集まった人々との出会い、自己の成長を求めるなら、アルバータ州で勉強することが最良の方法です。

留学生は本学付属の語学学校や専門学校でよく勉強しており、プログラムを修了した後は世界中の有名大学に進学しています。

国際教育において、アルバータ州が留学生を受け入れることも、アルバータ州から派遣することも、州にとってはこの上なく有益であることは明らかです。アルバータ州が世界と切磋琢磨し、生活、学業、観光に最良の場でありつづけることは価値のあることなのです。



There are many reasons why people from foreign countries choose to study in Alberta schools each year. Not only does Alberta have stunning scenery, friendly people and safe communities, Alberta is also internationally recognized for the excellence of its education system. Our own students enjoy the benefits of a high-quality curriculum, a strong assessment program, highly trained teachers, and education opportunities enhanced by innovative technologies. This dynamic learning environment results in high academic achievement which Alberta's students consistently demonstrate on international assessments.

It is our pleasure to welcome international students to experience the same benefits Alberta's students enjoy. Alberta school jurisdictions currently host a number of international students from countries around the world including Korea, Japan, China, Hong Kong, Mexico and Germany. Studying in Alberta is an excellent way to build language skills, learn more about Canada and North America, meet people from around the world and broaden personal horizons. International students do very well in our schools and colleges and those who achieve an Alberta Diploma are accepted at some of the most prestigious universities in the world.

International education is clearly a tremendous benefit to Alberta, both by students coming here to study and by Albertans going abroad. It is a valuable component of Alberta competing in the world and continuing to be one of the best places to live, work, and visit.

アルバータ州で学ぶ

PRICELESS

2005年アルバータ大学VSCP就学証書プログラム参加

2007年2月14日、札幌市教育文化会館でアルバータ大学のジョン・ケネリー教授による講演会が行なわれました。私はこの講演会に会場スタッフとして参加したのですが、私自身この講演会をとても楽しみにしていました。その理由としては大きく分けて2つのことが挙げられます。

まず1つ目に、私は2005年から2006年にかけての1年間、アルバータ大学で語学留学をしていたので、アルバータ大学というものをとても身近に感じていたということです。

2つ目に、講演会の内容が「牛乳の可能性」だったという事です。現在、私は食品科学科の「乳製品製造学研究室」に所属しており、牛乳とは深く関わった勉強をしています。そこで、ケネリー教授の講演会を通じて、少しでも自分の勉強に役立てていければいいと考えていました。

講演会の始まる前、ケネリー教授と話す時間があったのですが、第一印象は私がカナダで接してきた多くの人々と同じく、とても「フレンドリー」な人といった感じでした。気さくに話しかけてくれ、緊張などすぐに消えてなくなりました。

講演が始まると、私は約1年前の出来事をすぐに思い出してしまいました。それはまるでカナダで講義を受けているかの

ような感覚でした。ケネリー教授とはアルバータ大学にいたとき面識はなかったのですが、その講義は「初めて」とは感じず、どこか「懐かしい」とさえ思いました。

あつという間に講演会は終了し、会場の後片付けをしている時、ふと私は「本当にカナダで1年間生活していたのだな。」と考えてしまいました。カナダでは、日本とは違う文化・習慣に触れ、様々な国の人々と会話し、進んで新しい事、面白そうな事に挑戦していきました。けっして楽しい事ばかりではなく、辛い事、悲しい事もたくさんありました。しかし、それらの経験があるからこそ成長できたし、今の自分があると思います。今の自分の人生をカナダの生活抜きでは語れません。

そんな自分自身を成長させてくれたカナダに、今年新たに3人の酪農大の学生が出発しようとしています。3人とは会場スタッフとして一緒に働き、少しではありますが話もしました。3人ともカナダに行く楽しみと不安が半々といった様子で、私自身も出発前はそんな気持ちだったなとしみじみ感じました。しかし、そんな彼らを羨ましく思ったのも事実でした。

カナダから帰ってきて約10ヶ月が過ぎようとしています。私の部屋には、カナダで出会った人達を書いてくれた寄せ書き

酪農学園大学 酪農学部 食品科学科4年
上野 正人

やみんなの写りが飾ってあります。それらをじっと見つめ、カナダでの生活を思い出したりします。たしかにカナダでの生活を「楽しかった」と振り返る事はできます。しかし、「過去」ばかり振り返ってはけっして前には進めません。「過去」を振り返るのではなく、その「過去」を自分自身の「土台」とし、これからの夢に向かって一歩ずつ前進していきたいと思えます。

最後に、人との出会いは「一期一会」と言います。そんなすばらしいカナダでの「一期一会」に感謝したいと思います。ありがとうカナダ。ありがとうアルバータ。

アルバータ州豆知識

アルバータ州原産の宝石「アンモライト(Ammolite)」:「アンモライト」とは、アルバータ州南部で発見された非常に珍しい宝石です。母体となるアンモナイトが長い年月をかけて化石となり、大自然の力によって虹色に輝く「アンモライト」になりました。1981年に国際有色宝石協会により、公式に宝石として認定されました。アンモナイトの化石は世界各地で発見されていますが、宝石としての価値が認められる良質なアンモライトは、地殻の成分や地圧など特殊な地質条件が揃ったカナダアルバータ州で産出されています。



交流実績一覧

	年 度	教育者・研究者		学 生		酪農青年		計			備 考
		派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	合計	
1	1974 昭和49	1				8		9		9	
2	1975 昭和50	1				9	1	10	1	11	
3	1976 昭和51	1				9	1	10	1	11	
4	1977 昭和52	1		1		10	6	12	6	18	学生派遣はアルバータ大学大学院
5	1978 昭和53	1				10	2	11	2	13	
6	1979 昭和54	1	1	1		8	4	10	5	15	学生派遣はアルバータ大学大学院
7	1980 昭和55	1	1			9	3	10	4	14	
8	1981 昭和56	1	1			10	4	11	5	16	
9	1982 昭和57	1		1		10	5	12	5	17	学生派遣はアルバータ大学大学院
10	1983 昭和58	1	2			4	4	5	6	11	
11	1984 昭和59		1			5	2	5	3	8	
12	1985 昭和60		1			7	1	7	2	9	
13	1986 昭和61					7	1	7	1	8	
14	1987 昭和62					8	2	8	2	10	
15	1988 昭和63					9	1	9	1	10	
16	1989 平成元					6		6		6	
17	1990 平成 2			1		10		11		11	学生派遣はオールズカレッジ
18	1991 平成 3			4				4		4	オールズカレッジ
19	1992 平成 4		1	1		1		2	1	3	学生派遣はオールズカレッジ
20	1993 平成 5			7		2		9		9	学生派遣はオールズカレッジ
21	1994 平成 6			2				2		2	オールズカレッジ
22	1995 平成 7			4				4		4	オールズカレッジ
23	1996 平成 8			7		3		10		10	学生派遣はオールズカレッジ
24	1997 平成 9			10		1		11		11	学生派遣はオールズカレッジ6名、アルバータ大4名
25	1998 平成10			6				6		6	オールズカレッジ
26	1999 平成11			2				2		2	オールズカレッジ
27	2000 平成12			4				4		4	オールズカレッジ
28	2001 平成13			3				3		3	オールズカレッジ
29	2002 平成14			1				1		1	オールズカレッジ
30	2003 平成15			2				2		2	オールズカレッジ
31	2004 平成16			1				1		1	オールズカレッジ
32	2005 平成17			1				1		1	オールズカレッジ
33	2006 平成18			4				4		4	オールズカレッジ (内1名は英語研修コースで派遣)
34	2007 平成19			3				3		3	オールズカレッジ (内2名は英語研修コースで派遣)
計		10	8	66	0	146	37	222	45	267	
合計		18		66		183		267			

※酪農青年派遣事業はワーキングビザで渡航、1992年からはワーキングホリデービザで渡航

※2006年学生派遣より、英語研修コースを新設（ファームステイの代わりにアルバータ大学ELPで英語集中研修）

会費・寄付金

誠にありがとうございました。感謝をもってご報告申し上げます。(順不同・敬称略)

加藤 寛治 筒井 雅弘 伊藤 智 井上 希 遠藤 一昭
 加藤 源祐 掛川 洋子 宮川 俊幸 五十嵐広司 佐藤 康彦
 柴田 直紀 小松原昇一 松浦 健治 杉浦 真 杉山 久
 杉本 和彦 青野 芳樹 千葉 喜好 泉澤 章彦 相澤 親
 大関 和彦 大武 亜弓 池本麻由子 中村 智子 長井 信之
 梅津 学 美誉志征彦 矢田 一則 (以上28件)

(社)北海道酪農協会 (社)北海道ホルスタイン農業協同組合 雪印乳業(株)
 雪印種苗(株) (有)町村農場 (有)金川牧場 酪農学園大学 (財)酪農学園後援会 (以上8件)

2006(平成18)年度会費・寄付金・助成金 合計 1,975,000円
 平成19年3月9日現在

Alberta News No.96

発行所 北海道アルバータ酪農科学技術交流協会
 〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582 酪農学園エクステンションセンター内
 TEL (011) 386-1292 FAX (011) 387-2805 http://www.rakuno.ac.jp/dep26 E-mail:exc-alt@rakuno.ac.jp

発行人 平尾 和義
 編集責任者 堂地 修
 印刷 社会福祉法人 北海道リハビリ

編集後記

初めてアルバータだよりの編集に携わらせていただくのを機に、「アルバータだよりを「アルバータニュース」に一新しました。リニューアル第1号は、従来よりも「アルバータ州」を色濃く出せたように思います。「アルバータニュース」は、北海道アルバータ酪農科学技術交流協会を讀者の方々により身近に感じていただけるような読みものにしていきたいと考えております。今後ともご愛読よろしくお願ひ申し上げます。(篠原)